

「時代」背負う高齢者 厚生白書を読んで

白井正夫 元朝日新聞編集委員

万葉歌人、山上憶良が没したのは天平5年(733年)と伝わっている。74歳だった。朝廷に仕えた学識の人で、遣唐使の一員として唐に渡り、帰国して晩年に筑前守になるが、万葉歌人では珍しく人生の喜び悲しみを詠んだ個性的な歌人として知られている。「瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして 唄はゆ……」など子への慈しみを歌った歌が万葉集に収められ、私たちにもなじみの歌が現代に生き続けている。

74歳というと、奈良時代の人としては随分長生きしたとみられる。それだけ加齢とともに進む肉体の衰えに長年苦しんだ。万葉集にも「沈痾自哀文」「老身に病を重ね、年を経て辛苦して児等を思ふ歌」(いずれも巻五)など、老いを嘆き、病を悲しむ漢詩文や和歌を残している。

「初めて沈痾してよりこのかた年月や多し この時に年は七十有四 ただ年老いたるのみにあらず またこの病を加う 四支動かす 百節皆いたみ 身体はなはだ重きこと石を負うがごとし」

憶良も歌う老い 一律弱者でないと

沈痾自哀文の一節一節から、人間として避けることのできない悲哀が伝わってくる。また世の移ろいを悲しんだ歌でも「手束杖腰にたがねて か行けば人に厭はえ かく行けば 人に憎まれ老をは かくのみならし……」と老いを

見据えている。老病は確かに高齢者が持つ一面だが、そんなに悲観しなくてもいいのにと思いながら、憶良の漢詩文、歌を読むたびに「老い」に悩む人は万葉の昔からも多かったのだと思いを馳せてしまう。

ところが現代の高齢者には、老いをあからさまに嘆く憶良の心情に浸ることは許されそうもない。

「新しい高齢者像を求めて」と題して厚生省が7月に出した2000年版「厚生白書」が、「高齢者を一律に弱者とみるべきではない」と打ち出したのだ。「弱者でない」というのは心身面だけでなく経済面も含み、白書は21世紀に向けた高齢者像を「長年、知識・経験を培い、豊かな能力と意欲を持つ人」と描いてみせた。

中でも経済面は強調したかったらしく、高齢世代と現役世代の経済力を比較する諸統計を駆使して「高齢世代の経済的ゆとり」を並べている。そのころは、少子高齢化がすすむ社会保障システムの中で応分の負担を高齢者にも求めることにあるようだ。高齢者世代はただ一方的に「支えられる」だけの存在ではなく、現役世代とともに負担を担い、互いに「支え合う」存在だと言っている。

ある日突然、「あなたは意欲もあり、懐も豊かです」と持ち上げられてもこそばゆい。下世話風に言えば「年寄り顔していても、結構元気で財布は重いん

だから、世間の世話ばかりになりなさんな」ということが見え見えだ。

かつて官庁の施策年報といわれた白書は、近年「政策の国民との接点」として作り方も工夫されてきた。少子社会と子育てをテーマにした98年版厚生白書が、当時の小泉厚相のかけ声で女性官僚を編集の中心にすえて、大いに話題になった。初めて漫画や少子社会に挑む地域ルポを掲載し、その後の子育て支援推進に影響力を及ぼした。今年の白書も新聞各紙に大きく報道、評論され話題になった。

厚生省が新しい高齢者像を示す背景は、世界でも例がないスピードで進む高齢化率の伸びで、目前に迫る超高齢社会の到来にある。総人口に占める65歳以上者の割合は、今年(2000年)は17%台に乗り、2015年には25%、2050年には32%になると推計されている。高齢者数も現在は2200万人だが、20年後には1146万人増える。特に戦後の第1次ベビーブームの「団塊の世代」が高齢期を迎えるので、東京・大阪・名古屋の三大都市圏では全国平均を上回る伸びが予測される。

懐の豊かさ並べ 支え合う世代強調

わが国の社会保障は、現役世代が高齢世代を支える「世代間扶養」の仕組みで保たれている。この制度のもとで国民に給付される年間96兆円の社会保障費のうち、年金、医療などの高齢者向け給付が65%を占めている。白書は、高齢化率の急速な伸びで「世代間扶養のバランスが崩れる」と指摘し、「すべての世代がともに支え合う視点が重要になる」と提案した。高齢者にも応分の負担を、というわけだ。

そのための環境づくりに「高齢者の懐の豊かさ」と「現役世代と遜色ない経済力」のデータが強調して使われている。世帯単位の所得を比較した「65歳以上の高齢者のいる世帯の所得(1997年)」(表)が、その根拠の1つになっている。

この表によると、高齢者世帯(65歳以上の人だけ)の年間所得は平均323万円で国民全世帯平均(658万円)の半分だが、世帯1人当たりの所得は、高齢

者世帯207万円、国民全世帯223万円
で「遜色ない水準」というのである。何
やら数字のマジックのようだが、高齢
者世帯の世帯人数が少ないので計算上
はこうなる。また、世帯主が65歳以上
の世帯の平均所得(203万円)は、現役
バリバリの30代世帯主(211万円)、40
代世帯主(230万円)と比べて「同程度
の水準」と言っている。

白書は「豊かな高齢者」データのオン
パレードである。

貯蓄でも、世帯主が60歳以上の世帯
では2300万円で40代の2倍だし、50
代の1909万円も上回るとした。世帯主
が70歳以上の世帯総資産額は貯蓄や不
動産などで平均9000万円を超す、とい
うのにはギョッとしたが、面白いのは
1985年以降の1人当たりの消費支出の
推移だろう。世帯主の年齢別では、高
齢者世帯が40%増と最も伸び、30代
後半世帯を10ポイント以上引き離れた。
高齢者は使う金を持っている証しと言
いたげだ。

化粧ひとつにも 変わる高齢者観

しかし、これらはあくまで平均値で、
個々の高齢者の実像をどれだけ描いて
いるのだろうか。高齢者の70%以上は
所得の半分以上を社会保障給付に頼っ
ている現実がある。また、女性の独り
暮らし高齢者の年間所得は173万円で、
その70%以上が公的年金頼りだ。弱者
はいるのである。高齢者の貯金が多い
(ほんの少しだが)と言われても、それ
は安心できない老後の不安の裏返しで
ある。それを逆手に取られては酷だし、
都合のいいデータを並べて「豊かさ」を
強調されても、ああそうですかと素直

になれない。

白書は経済面の評価だ
けでなく、心と体の健康
面からも「活力と意欲あ
る高齢者」像を描いてい
る。

毎日の運動持続で「老
化ストップ」をはかる健
康科学研究が紹介されて
いる。仙台市シルバーセ
ンターでは、公募した60
~80歳の30人に週2、3
回、1回に2時間、ストレッチ体操や
リズム体操をしてもらい、これを半年
続けた。月に1、2回開かれる健康教室
参加者と比べると、持久力を表す最大
酸素摂取量の伸びが著しく、平均10%
増えていた。数値上は「5歳程度若返
った」ことになる。高齢期に入っての運
動は、持久力・筋力アップ、そして老
化防止、病予防につながるという。

こころの健康維持では、「身だしなみ」
の効用に1項目設けている。総務庁の
調査では、60歳以上の男女で53%が
「おしゃれに」関心を持っている。関心
度が高いのは外出着、身だしなみ、髪
形。外見を気にしたにしても、「おしゃ
れ心」は健やかな高齢者には欠かせない
としている。女性の場合、化粧・美容
で気分が高揚して脳の活性化を呼び、
血液の循環がよくなったという調査結
果が出ている。

3年前、秋田県鷹巣町のデイセンタ
ーを訪ねた時、職員がお年寄りの女性
に軽く紅をひいてやるのを見たことが
ある。職員はポケットからさりげなく
口紅を出して、冗談をかわしながら手
を動かしたら、しかめ面していた女性
の顔から笑みがもれたのを覚えている。

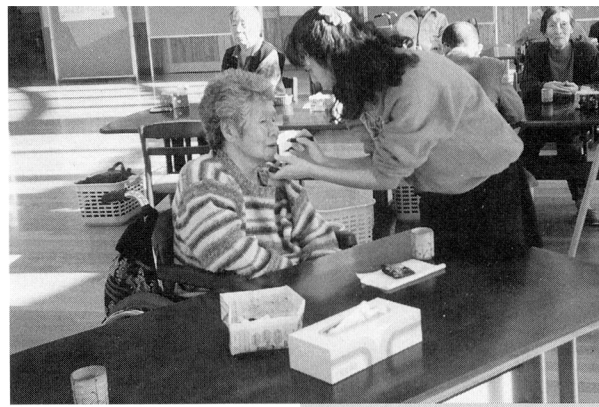


写真 口紅をひいてもらう高齢者。「厚生白書」は化粧で気分
高揚を、とうたっている。

こうした光景はいま、各地のデイセン
ターや特養ホームでよく見かけるよう
になった。口紅をひくだけでも、高齢
者は美しく、明るくなる(写真)。

こうした白書の勧めに異論はない。
高齢者の能力、意欲は余暇の過ごし方
をも変えた。「ゲートボール、温泉、カ
ラオケ」の3種娯楽はいま、「海外・国
内旅行、プール水泳、創作活動」に変
わったといわれる。やがてこれにパソ
コンが加わり、高齢者が活動する世界
は飛躍的に広がる。

数年前、厚生省の懇談会が高齢者を
「70歳以上」とする新しい高齢者観を
提言したことがある。寿命が伸びて、
元気な人が増えて、「65歳以上」が実
情とずれがあり、せめて70歳ぐら
いまでは働き、活動できる社会環境づ
くりが必要というのが、議論の出発点だ
った。背景にはやがて避けられない「高
齢者も負担する」時代への地ならしが
あった。

実は、厚生白書に勧められるまでも
なく、高齢者はすでに「負担」という担
い手に組み込まれている。介護保険は、
しばらく徴収延期されているとはいえ、
65歳以上も保険料を納める仕組みだ。
また3月の年金制度改正で、働く高齢
者は70歳まで厚生年金保険料を支払う
ことになった。

高齢者という言葉は、時に敬われ、
憐れまれ、時に持ち上げられながら、そ
の生きる「時代」を背負っている。背負
わされていると言った方が正確かもしれ
ない。老歌人がいま世にあれば、老
いをどう歌うだろうか。

表 高齢者のいる世帯の所得(1997年)

	1世帯当たり(単位:万円)		世帯1人当たり(単位:万円)		平均世帯人数
	平均所得額	平均不可分所得額	平均所得額	平均不可分所得額	
高齢者世帯	323	285	207	183	1.56
世帯主が65歳以上の世帯	520	441	203	175	2.56
65歳以上の人がある世帯	635	534	203	174	3.12
国民全世帯	658	550	223	187	2.95

(2000年版厚生白書より抜粋)

●しらいまさお